

「御怒りを受けるべき子ら」

エペソ人への手紙 2 : 1 - 6

May.1.2022

エペソ人への手紙 2 : 1 - 6 (パウロ)

Preface

先週は、神の大能の力によって死よりよみがえられたイエス・キリストが、すべての支配、権威、権力、主権の上に置かれ、ありとあらゆるすべてのものの万物をその足の下に従わせるすべてのもののの上に立つかしらとなられたこと、

また、その万物のかしらなるお方がキリストを信じる者たち一人一人と連なっていて、有機的かつ命を持ったひとつのからだ、運命共同体が教会であることを学びました。

そして今日からエペソ書 2 章に入って参りますが、2 : 1 の始めの言葉が「さて」という接続詞から始まっており、あたかも 1 章の内容とは違うまた新たな主題に入っていくような印象を与えていますが、実際は、「そして」または「また」という風に訳した方が適切だと思われる kai というギリシャ語の接続時が使われています。

即ち、1 章と 2 章とは切れている、話している内容が違うものではなく、1 章の続きとして書かれているのが 2 章の内容です。

私たちキリスト者一人一人がキリストをかしらとするひとつのからだ、互いに心臓と肺の関係となったけれども、私たちのからだの中の心臓と肺が比類なきコンビネーション、バランス、役割分担、相思相愛、持ちつ持たれつ、おかげ様、お互い様の関係で命を保っているように、キリスト者同士が繋がってひとつのからだを保っている、建て上げているということは、実のところとてもとてもあり得ないほど驚くべきことであり、これこそ正に奇跡であるということを、2 章で今一度確認させてくれます。

何をもって確認させてくれるかと言いますと、私たち一人一人がどうしようもない、救いようのない生粋の根っからの罪人であることを確認させることをもってです。

私たちがひとつのからだを成せているのは、全的に神様の大きな愛、恵み、哀れみ、キリスト・イエスの聖なる犠牲によるものでしかないことを、今一度しっかりと記憶させてくれます。

私たちが今こうして私たちでいられること、私たちが今こうして何の制限もなく、ある意味我が物顔で神様を礼拝できる場にいられることは、私たちの神を敬い慎む敬虔な姿勢や信仰心、善意善行によるものではなく、ただただ神より与えられた恵みでしかないことをパウロは重ね重ね語っていきます。

事実、私たちよくよく考えてもいいですし、考える間もなく、神の前にあって
私たちが誇れるものは何もなく、私たちに根拠となるものは何也没有せん。

漫画や映画などで、心臓が飛び出してドクンドクンしているような描写
がありますが、実際にそうならそれは死を意味します。

そんな風に私たちの肺や心臓自ら飛び出して自らを誇ることもなんか無いよう
に、キリストのからだの部分である私たちキリスト者が誇れるものなどなく、か
しらであられるキリストの命に従って生きることこそ、運命共同体としての
まことの命を育めるんだということを、パウロはもう一歩突っ込んだ話をしな
がら教えてくれます。

Part One

エペソ書2章の大きなテーマのうちの一つに、「敵意」を廃棄した「和解」と
いうものがありますが、「和解」は、自分が心臓であり肺であるという体の部分
であることを忘れ、自らをかしらとする時には、決して起こり得ない夢物語です。

「敵意」というのは、神の大きなご愛によって生かされ、神の計り知れない慈
しみと哀れみによって許され、キリストの無条件の犠牲の恵みによってキリス
トとともに生かされたから今の私があるということ、そして、あの人も私と同じ
ようにキリストの愛を受けておられる方であるということ覚えられない時に
生じるものです。

この敵意と和解については、2ヶ月後ぐらいにまた改めて詳しく触れていき
たいと思っていますが、今2章の最初の部分で使徒パウロが改めて伝えたいと
思っていることは、誰もイエス・キリストのからだになるべくしてなった、また
は、「もともと私はキリストの心臓で肺だったんだ」と誇れる者なんか誰一人と
していないということです。

私たち人間が最もひん曲げたいと思う本能のうち代表的なものが、「神様が私
の主人である」ということです。

だから、受けた恵みを恵みだと認めるためには、私たちのそのねじ曲がった根
性がどれほどに深刻で、どれほど染み付いた罪人であるのかを心底知ること以
外、方法はありません。

そこでパウロは、この2章の冒頭から、罪人とはどれだけ深刻なのかをハッキリ
させようとしています。

エペソ人への手紙2：1－3（パウロ）

私たちすべての人間は、一人残らず、元々自分の罪過と罪の中に死んでいた者

でありました。

そしていつか死ぬだろうという死に対する恐怖心を煽り、命に繋がっていない神なき“自立心”と自らを誇りたい“虚栄心”と人間は人間の力だけでやれるしやってきたという“可能性”という世の流れを作り、そこにどっぷりつからせている空中の権威を持つ支配者サタン悪霊どもの手の内で生きているように死んでいることにも気付かず、自分の肉と心の欲のままに生きていた、生まれながらに神の御怒りを受けて当然の者であったことを忘れてはならないことの大切さを教えてくれます。

皆さん、今ここで言っているような神の御怒りを受けるべき子らであったことを認めますか？ 認められますか？

これが認められないと、どこまで行っても口では頭では、「私はキリストのからだとされた者である」と言い、また思ったところで、実質的には、共に配慮し合い、共に苦しみ、共に尊び、共に喜ぶ、分裂のないひとつのからだであるということを否定することになりかねません。

Part Two

飛行機が飛び、リニアモーターカーが走り、宇宙旅行が現実のものとなり、ボタン一つで世界を廃墟に出来てしまうような武器を有する現代の文明社会にあって、サタンや悪霊どもは、聖書に登場してくるようなオカルチックな明らかに普通ではない登場の仕方はほとんどしません。

もしそのように現れてくれるならば、私たちキリスト者にとっては簡単なことです。

「主イエスの名によって、サタンよ退け！」と、神の子としての權威をもって命じれば、それで解決です。

なんの怖いこともありません。

しかし、今のような文明社会にあっては、ネクタイをし、スーツをビシッと決め、頭脳明晰、ユーモアや上品さや伝統や、人が認める名誉や富や力まで兼ね備えて、その尻尾を掴むことさえも難しいほどに、その尻尾を掴んだとしてもその身を装って世の流れを作り、世論を味方につけ、神の仰る正しさが間違っているかのように、私たちを愛して止まないまことの父なる神様の存在なんかあたかも無いかのように、唯一の神なんか無いように生きることこそ知的で、賢明で、最先端で、合理的で、文明的で、人権的で、教育水準が高く、成功した人生であるかのように導くのがサタンです。

彼らは決して、まかり間違っても、皆さんよく知っている聖書箇所伝道者の書のような悟りへと私たちを導くようなことは決してありません。

伝道者の書 1 : 2 - 11、14 (パワポ)

伝道者の書 12 : 13 - 14 (パワポ)

こんなことを悟るところへとは、決して、サタンは私たち人間を導きません。

神は私たち人を導くお方ですが、サタンも神を装って人を導きます。

ただ、神の導きとサタンの導きには大きな違いがあります。

それは言葉です。

サタンには言葉がありません。

話せないということではなく、自分たちが作った流れに沿って生きている、血肉に属し生まれながらにこの世の霊を受けた人間たちに、「お前は、お前たちは私の手下だ。私の奴隷だ。一兵卒だ。捨て駒だ。私の霊に属している」なんてことは、一切言いません。

言う必要もなく、私たちの生まれながらの罪が、その流れに本能的に従って生きます。

サタンや悪霊どもは、言葉なく、人々を導きます。

なぜならば、そこに愛がないからです。

本来、言葉は愛でもあります。

愛なる神様は言葉をもって天地万物を創造しただけでなく、人間が他の動植物と明確に違う特徴のうちの一つとして言葉を与えてくださいました。

第二次世界大戦中のドイツや日本で惨たらしい人体実験が行われたことは周知の事実ですが、その中でも一切血を流さないこれは冷徹な人体実験が、生まれたての赤ん坊に必要な栄養分と言語を掛け続けるグループと、必要な栄養分は与えるけれども一切言葉をかけない赤ちゃんのグループとに分けて行った人体実験です。

この実験の結果、必要な栄養分を十分に与えながらも、一切言葉をかけない赤ん坊はすべて死にました。

サタンには言葉がありません。

ただ、無言で導くだけです。

Part Three

しかし、神様には言葉があります。

なぜなら、神は愛なる神であり、無条件で私たちを愛しておられるからです。

神様は、創世の最初の最初からずっと言葉を人にかけて続け、それだけでは飽き足らず、私たち人に語り掛けた言葉を2000年近くという長い時間を懸けて、

人を用いて書き記し、国が滅び、民族が滅び、民族の言葉が失われても、神の言葉は滅びず、失われることもなく、保存され、神の言葉をすべての人々に伝えるために現代文明の産声であり走りである印刷機まで人に作らせ、

今や全世界どこでも、聖書が禁書で、聖書を持っているだけでも死刑になってしまうような国々にも、神の言葉である聖書があります。

本来ならば、こんな古代文書、普通に考えたら立派な博物館に鎮座して、どんなにお金を出してもとても買えないような代物となっていたはずですが、今私たちは、これを手にすることが出来ています。

何としてでも、愛のあらわれである神の言葉を一人でも多くの人々に、人々の分かる言葉で、分かるように語り掛けるため、神の言葉を時代を超え、世紀を超えてご自身守り続け、今もその言葉をもって人々に語り続けてくださいます。

ところが、その聖書の中に記録されている神の言葉は、優しく、耳に聞きやすく、甘い言葉であるどころか、むしろ、叱咤激励、警告、時には、脅し、呪いのような論調で語られていることがほとんどと言っても、過言ではありません。なぜならば、真剣だからです。

この真剣さゆえに、時々分かりにくいこともあります。

溢れる思いが凄すぎて、ちょっと聞き取りにくいこともあります。

さらには、怒りを露わにされながら、真剣にお語りになることもあります。

怒ってしまわれるほどに真剣です。

怒りには、相手を思う怒りと自分のことを思う怒りの二通りの怒りがありますが、神様の怒りは、一点の曇りもない相手を思う真剣な怒りです。

親が子を叱る時でさえも「子供のためだ」と言いながら、結局、親自身のプライドや正当化や怒りに乗じて叱り飛ばす時が多々ありますが、父なる神様の私たち一人一人の人間に対する怒りは、愛でしかありません。

聖書に記録されている言葉の語り口は、イエス様でさえも、意外にも叱咤激励、警告、脅し、呪いのような論調が少なくありませんが、その父なる神と御子なるイエス様の行いは、その語り口とはそぐわないほどに、この上ない愛と恵みと慈しみと柔和と平安です。

もう一度エペソ書 2：1－6 の御言葉を読んでみたいと思います。

エペソ人への手紙 2：1－6（パウロ）

1 節の内容と 6 節の内容との間に、とてつもないギャップがあることが見えてきませんか？

自分の背きと罪の中に死んでいた者には到底そぐわないように思える、キリストとともに天上に座らせていただくという結果へと導かれています。

この1節と6節のギャップが途轍もないものであることを表わす言葉が、3節の最後にある「生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」という言葉です。

「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」という何ともしがたいギャップ、隔たり、隔ての壁を、キリストの十字架の犠牲によって打ち壊し、キリストとともによみがえらせ、キリストのからだとして万物を統べ治める者となって天上に座らせていただくという天地がひっくり返るよりもあり得ない神の大きな愛と、キリストの無条件の恵みが、皆さん、この御言葉に見えるでしょうか？

これ以上、私たちに必要なものがあるでしょうか？

これ以上、私たちに何が必要でしょうか？

もちろん、必要なものがあるでしょうが、その必要なもの、この神の愛とキリストの恵みに匹敵するほどに必要なものでしょうか？

Part Four

「柔和」という御霊の実がありますが、聖書の中で柔和と呼ばれた人物は、モーセとイエス様しかいません。

じゃ、柔和という言葉が一体全体何ゆえに、モーセとイエス様にしか用いられなかったのか？

「柔和」と訳されている聖書の言語は、「制御された強さ」という意味を持つ言葉です。

元々この言葉は、調教された馬を描写する時に使われた言葉でもあります。

つまり、馬として本来持っている力は変わらないものの、調教されたことで、本来持っている強さが制御されて、主人の役に立つようになるということです。

即ち、柔和とは、弱々しさを意味するものではなく、芯の強さを表す言葉なんです。

英語の聖書でピリピ書4：5を見ますと、「あなたがたの柔和な心をすべての人に示しなさい」とありますが、柔和とは、一人一人の人に対する反応の仕方をコントロール出来ることです。

つまり、相手の態度によって安易に反応したりせずに、人に対する応答の仕方を自ら選択していくこと、接する一人一人に理解とあわれみ深い態度で接するということです。

要求ばかりでなく、理解を示すことが柔和です。

たとえ失望されることがあっても、その人を裁いて終わるのではなく、理

解しようとその痛みに共感しようと同じ体の部分として接していくこと、
人の失敗の記録をいつまでも保存するのではなく、消していくこと。

正に、モーセとイエス様の生き方でした。

ではなぜ、これだけモーセとイエス様が柔和でいられたのか？

誰でも人は罪の中に死んでいた者であり、生まれながら御怒りを受けるべき子らであるけれども、神の愛ゆえにキリストのからだとしてともに天上に座らせていただけるという恵みがどれほどあり得ないことで、それ以上のことは必要もなければ、必要に値しないということを骨身に染みるほどに分かっておられたからでしょう。

また、どんな人もキリストのからだとして自分と同じく天上に座らせていただける可能性を秘めており、もう既にキリストのからだとして神の宝の民とされているという事実ゆえに、柔和、その人に要求ばかりするのではなく、理解を示す生き方でいられたのでしょう。

パウロは、私たちがキリストをかしらとするひとつのからだ、教会であることをさらに深く突っ込んで教え、からだのパーツ同士争うのではなく、理解を示し、最高のバランスで、コンビネーションで、役割分担で、相思相愛で、持ちつ持たれつ、お陰様で、お互い様の関係で命を、からだをキリストに繋がって保つことの実践を求めるために、私たちの本来あるどうしようもない姿、それを遥かに勝る神の愛を指し示しています。

Part Five

最後にもう1箇所だけ、罪人である者が天上に座っているということが、どれだけあり得ないことで、途方もないことなのかを明確に教えてくれるイエス様の話された話がありますので、見てみたいと思います。

ルカの福音書16：19－31（パワポ）

「まことの神を信じながらも境遇に恵まれず、どんなに生きるのが辛く苦しい人生であったとしても、イエス様を見上げながら生きれば必ず報われるから」というメッセージも内包している話でもあります。

何よりもこの話が私たちに訴えてくる衝撃は、死んだ金持ちとラザロの間にあるギャップ、大きな淵です。

エペソ書2章1節と6節にあるギャップ、到底超えることの出来ないギャップ、水一滴さえも施すことの出来ないギャップ、超えようにも超えられない隔ての壁、イエス・キリストを信じ罪赦されて行く天の御国とイエス・キリストを信じず自分の罪過と罪の中死んで行く地獄の隔たりです。

本来人は皆生まれながら御怒りを受けるべき子らであるために、自動的に行く地獄のむごたらしさとサタンの高笑い、それでも、それを凌駕する神の救いがあるという事実とイエス・キリストを信じ罪赦されていく天の御国があるという事実を教えてください。

そして、その事実を人々に伝える方法は、死んだ人が再び生き返って、「本当に、イエス・キリストを信じて行く天国と信じないで行ってしまう地獄があるんだ」ということを宣べ伝える方法ではなく、

モーセと預言者たち、つまり、モーセや預言者たちによって書き残された神の言葉である聖書が方法です。

聖書の言葉を信じないならば、死んだ人が生き返って話したところで、人は信じません。

「何馬鹿なことを言ってんだ、この人は！」で終わりです。

Conclusion

私たちにはもうすでに語られている神の言葉があります。

この神の言葉を信じませんか。

これを信じるだけでいいんです。

信じられなかったら、信じられるように祈りませんか。

祈れなかったら、求め、叩きませんか。

そして、信じられている方々は、こんなギャップを超えてキリストのからだとされていること、自分だけがキリストのからだとされているのではなく、あの方も、この方も、自分と同じようにキリストの尊いからだとされているということを感じて、理解と配慮に生きようではありませんか。

そのように生きていけることが、恵みでもあります。

だから、そのように生きていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 2：6